

# 新嘗祭

毎年十一月二十三日は、宮中の神嘉殿しんかでんにおいて天皇陛下がその年の新穀を神々に御親供ごしんくされる「新嘗祭」が執り行われます。

古くは、十一月の第二卯うの日を選んで祭が行われましたが、明治六年、暦が旧暦から現行の新暦に変更されたことに伴い、現在の十一月二十三日となりました。戦後この日は「勤労感謝の日」と改称され、「勤労を尊び、生産を祝い、国民が互いに感謝しあう日」として国民の祝日となりましたが、この日が単なる勤労感謝の日と意味が違ふことは、その起源から見ると明らかかなことです。

新嘗祭の起源については、『日本書紀』神代巻で天照大神が「吾が高天原にきこしめす齋庭ゆにわの稲穂を以てまた吾が兒みこにまかせまつるべし」「高天原（天上界）で食しているところの稲の穂をお前（天照大神の御子孫である皇御孫命）に授けるからこれを持って降りなさい」と仰せになり、邇邇にじじ芸尊の降臨に際して、齋庭の稲穂をお授けになったことに遡さかのぼる事が出来ます。高天原で育てられていた穀物の稲穂が、邇邇芸尊により初めて日本国にもたらされ、このことが我が国における農業の事始めとなりました。この御神恩ごしんおんに対する感謝の気持ち、そしてその年の新穀を得たことを神々に感謝する祭として、天皇陛下（皇御孫命）御親おんみから五穀の豊穰を神々に御奉告ごほうこくされるのが新嘗祭です。全国の神社に於いても、神恩奉謝しんおんほうしやの意をこめて、それぞれ新嘗祭が執り行われています。

この五穀豊穰の神事として興味深い民間行事があります。石川県の奥能登地方で行われている「アエノコト」（国指定重要無形文化財）という神事です。「アエ」は「饗応（「もてなす）」、「コト」は「祭り」を意味する語であると言われ、その神事の内容は各家によって異なりますが、通常は十二月四日、もしくは五日に田の神を迎えて、座敷に案内し、まず入浴していただいてから、その後お膳をすすめるという流れになります。田の神様に対しこのような丁寧な接待を行うことで、その年の収穫に感謝するのがこの神事の目的です。また、田の神は、そのまま各家で年越しをされ、二月九日には再び同様の神事をして豊作を祈り、田の神を送ります。

宮中や全国の神社にて行われる神事「新嘗祭」に加え、「アエノコト」のような民間で行われる神事が今でも盛んに行われていることは、いかに日本人の生活が稲作などの農耕と密接に関わってきたかをあらわしていると言えるでしょう。

以前の神道豆知識（其の百四十三）において取り上げましたが、日本の国は、現存する日本最古の書物『古事記』において「豊葦原の千秋の長五百秋の水穂の国」（「邪氣を払う葦あしの豊かに茂る原であって、いつまでも豊かな収穫が続く、みずみずしい稲のできる国」と記述されており、また日本最初の正史である『日本書紀』においても「豊葦原とよあしはらのちひ五百秋瑞穂みずほの地」（「豊かな葦の茂る原で大量に多年稲穂が収穫できる国」と記述されています。現在に於いても、その想いが綿々と受け継がれているその証が天皇陛下が御親供される「新嘗祭」であります。

古くより五穀（米・麦・粟・豆・黍きびまたは稗ひえ）に対する日本人の想いは、他の作物に比べて特別であり、その中でも日本人の主食である稲は、特に貴重な食物なのです。

## 【参考資料】

神社新報 第二四八三号『神道いろは』  
神道事典 國學院大學日本文化研究所